

学校不適応者のウェルネスと 自然体験活動のグループダイナミクス効果に関する研究

(平成23年度学術研究助成基金助成金・若手研究(B))



人間心理学科
木村文香 講師

科学研究費補助金が交付された
研究を紹介します。

学校不適応を取り巻く状況

少子化によって、不登校児童・生徒の数は一見、減っているようにも感じられますが、実際には、各学校に占める不登校者の割合である不登校率は、必ずしも減ってはいません。また、保健室登校のみならず、フリースクールなど学校以外の場所につながっている児童・生徒については、「不登校」としては計上しない場合があったり、学校に行っていないも、学校を乐しめない児童・生徒の存在は既知の事実であるなど、学校基本調査をはじめとする統計データから不登校や学校不適応の問題をとらえる限界も指摘されています。

このような状況に対し、スクールカウンセラー制度をはじめ、学校不適応の児童・生徒の心の問題への個別ケアの体制は、ハード、ソフトの両側面から整いつつあるといえます。しかし、それでも、中学3年時に不登校であった生徒のうち16.5%は、中学校卒業後3年経った時点で、いわゆるニート

の状態にあることが、内閣府によって報告されています。つまり、現在の支援体制によって長期的な社会適応を促すことは難しく、将来の社会的自立に向けた支援が重要な課題となっているのです。

グループダイナミクス効果の重要性

今回の研究で、具体的な支援プログラムを検討するにあたり注目しているのは、ウェルネスです。ウェルネスとは、個人の情緒や対人関係のスキル、生活習慣を相互に関係するものとして包括してとらえた心身の総合的な健康のことです。これを獲得することで、心身ともに安定して社会とのつながりをもつことができるようになり、社会的自立へとつながると考えることができます。今回の研究では、このようなウェルネスの獲得という観点から、学校不適応、ひいては社会への長期的な適応を支援する方略のひとつとして、自然体験活動を通じたグループワークを取り上げます。

自然体験活動の研究では、これまで、

対人関係のモチ方やパーソナリティなどの個人の心の問題に及ぼす効果にのみ焦点化されてきました。本研究では、自然体験活動を余暇教育の一つと捉え、生活習慣、情緒、対人関係といったスキルの獲得を目指す、支援プログラムを開発を行います。そのためには、個別の支援プログラムでは得られない、グループダイナミクスによる効果を把握することが重要と考えています。最終的には余暇生活をデザインすることができるようになることを目指しますが、効果的なプログラムには、どのようなグループダイナミクスの効果があるのかを検討することで、より良いプログラムを開発、提供したいと思っています。